

啓発資料
No.1019

パラグアイ国

アルトパラナ移住地案内

海外移住事業団

1970.1



国際協力事業団

受入 月日	'84. 9. 14	708
		23.4
登録No.	09588	EM

序

パラグアイは豊かな自然条件に恵まれ、将来発展の可能性を秘めた国として期待をかけられている。特に近年日パ両国の経済協力関係も親密の度を増しつつあるこの国に、現在まですでに約7,000人の日本人が移住しているが、これら日系人が、同国の各界で果たしている役割は大きいものがある。

この稿ではアルトパラナ移住地の現況について、現地支部より詳細な資料の提供があったので業務の資料としてとりまとめたものである。

JICA LIBRARY



1028802[5]

目 次

はじめに	4
1. 入植地の創設	4
2. 自然条件	5
(1) 位 置	5
(2) 気 候	5
(3) 土地条件	6
3. 入 植 者	7
(1) 入植者数	7
(2) 県人別動向	8
4. 造成分譲状況	8
(1) 道路の状況	8
(2) 分譲地（ロッテ）の状況	8
(3) ロッテの分譲価格	9
(4) 地券の発給状況	9
(5) 市街地分譲関係	9
5. 開拓状況	10
(1) 開拓の進め方	10
(2) 開拓面積	11
(3) 土地利用状況	11
(4) 土地拡大への意欲	11
6. 入植地内の生産販売状況	12
(1) 主な生産物の量及び販売額	12
(2) 販売ルート	13
7. 営農の基本類型	14
8. 上位農家の模範的営農例と今後の方向	16
9. 営農技術上の問題	19
10. 雇用労働の需給状況	20
11. 農業協同組合の活動	21
12. 営農資金	22
(1) 事業団融資	22
(2) 現地金融機関による融資	23
13. 入植地内の主な機関と活動状況	23

14. 各種団体の活動.....	26
15. 家庭生活.....	26
16. 保健及び医療.....	27
17. 教 育.....	27
18. 交通、通信.....	30
19. 移住地内の年間行事.....	31

はじめに

アルトパラナ入植地はパラグアイの間ではピラボと呼ばれている。

当入植地はイタプア県の中にあり隣りの県がアルトパラナ県でイグアス入植地がある、こんな点からもアルトパラナという名称は何んとなくまぎらわしい感じがするが、ピラボはガラニー語で、ピラは魚、ボは手を意味する、一説には手のはえた魚が住んでいる処という解釈があり、又一説には魚が手ずかみできるほど豊富な処という説がある。

いずれにしても日本人が入植する以前はまだ開発されていない原始地帯であった事は確である。84,217haの中にインディオが約100家族程2～3の部落をつくって住んでいて自分達が生活するだけの営みが静かに行なわれていた。

事業団の前身である移住振興会社の建設要員が入って初めて原住民のインディオが魚や、どうもろこしを売りに来た程度のものであった。

こんな話がある。大小さまざまな魚を竹に通して売りに来たインディオに、一匹いくらだと聞くと10ガラニーだという、魚の大きさは一匹1メートルから15センチまで種々さまざまであるが、一匹は一匹、全部同じ値がつけられていたという、昔の話ではない。これが10年前のアルトパラナの姿であった。

それがこの土地に日本人が入植し9年の歴史を経た現在、年間農業生産高6,500万Gsを産出する一大生産地に生れ変わった、今日のアルトパラナ入植地は既に、椰、どうもろこし、大豆及び桐実の生産地として市場に確固たる地歩を固めることに成功した。かつてのように生産した農産物が売れなかつたり不当に買叩かれることもなくなりかえって関係企業が原料を求めて入植地内に進出するような魅力を誇るようになった。パラグアイ資本の搾油会社であるCAPSAは市街地近くに工場を建設し、既に操業を開始している。又、待望の日系搾油会社であるイタプア製油商工K.K.(CAICISA)も日産処理能力大豆50ton、桐実140tonの高効率の機械をもって、入植地より80kmのエンカルナシオンに工場を建設している。

更に当地の養蚕の有望性を見込んだ日本の二大大手商社(片倉工業及び伊藤忠商事)はパラグアイ絹糸商工K.K.(ISEPSA)を設立し、今、この市街地に乾繭工場を建設している。

近年、世界的な人口の急増が、食糧危機を招くであろうと予言されているが、このパラグアイは優秀なパイオニアによる農牧開発を待っている。眠れる豊庫が最も地味豊かな原始林の形で存在している。

この開発の拠点としてアルトパラナ入植地は益々発展することであろう。

1. 入植地の創設

パラグアイ国内における第2の集団入植地として、フラム入植地(イタプア県所在、ア

ルトパラナ入植地より西北方約 50km に位置、1956年創設) に次ぎ設定したもので、1959年4月、海外移住事業団の前身である海外移住振興 K. K. が Harcastle 植民会社外1名のパラグアイ人よりピボラ地区約 22, 200ha の土地を購入したのが本移住地の始まりである。その後、隣接のカレンズ地区及びアカカラジャ地区の私有地を引き続き購入し、1961年5月現在のアルトパラナ入植地全土地の購入を了した。(総面積 84, 217ha, 購入価格合計約36百万ガラニー、邦貨約 105 百万円) 1960年、初代所長駒田勝の指揮のもと、道路造成区画測量等の入植地造成工事が進められ、1961年8月2日、日本より第1陣入植として26家族の移住者を迎えた。

2. 自然条件

(1) 位置

南緯27° 西経 55°40' を中心として、エンカルナシオン市の東北約 80km~100km に位置するパラナ河沿幅約 20km, 長さ約 40km の略梯形状の地区。

(2) 気候

当地区の気象資料は未だ観測年次が新しく、平均年としての表示はできないが、移住地の略中央に位置する。アルトパラナ農場(標高 200m)にて観測した結果は次表の通りである。(1965~1968年)

なお、これによると、冬期の気温は大陸内陸部の三寒四温的な傾向をもっていて日温度較差は 10~15°C 冬期の年平均降霜日数 7~15日位と見られる、(但し、強度の降霜は年 2~3 回程度)

雨量は一般に冬期は少なく、夏期に多い。年間降雨日数は 60~90日で雨量は 1, 500~

月	1965 年							1966 年						
	平均最高気温 °C	平均最低気温 °C	平均気温 °C	雨量 mm	雨天 日数	降霜 日数	平均最高気温 °C	平均最低気温 °C	平均気温 °C	雨量 mm	雨天 日数	降霜 日数		
1	31.2	17.0	25.5	118.7	7	—	30.6	17.0	25.4	273.5	13	—		
2	30.2	18.1	25.0	252.0	4	—	31.3	19.6	26.4	64.3	11	—		
3	27.9	13.7	22.0	99.9	3	—	29.1	15.7	23.5	17.3	15	—		
4	26.8	14.5	21.1	286.5	4	—	28.3	11.6	20.8	21.3	5	3		
5	22.2	10.1	16.9	185.9	4	1	27.5	12.5	20.5	37.3	4	—		
6	23.1	11.9	18.2	101.3	6	—	19.8	5.2	13.2	39.0	8	9		
7	20.0	8.2	14.4	205.3	8	6	21.3	8.7	16.8	205.2	13	2		
8	23.1	12.1	18.0	219.8	11	—	25.8	12.1	19.8	159.0	13	—		
9	23.5	10.8	18.1	90.9	15	—	27.4	14.7	22.5	182.3	14	—		
10	27.6	13.7	22.1	362.9	8	—	29.3	17.5	23.0	133.0	12	—		
11	28.4	15.6	23.5	52.4	10	—	28.5	15.2	24.1	112.8	6	—		
12	27.6	17.2	23.3	411.6	16	—	34.3	17.4	27.6	133.4	4	—		
合計 平均	26.0	13.8	20.7	2, 387.2	95	7	27.7	12.7	21.9	1, 378.4	118	14		

月	1967 年						1988 年					
	平均最高気温 °C	平均最低気温 °C	平均気温 °C	雨量 mm	雨天日数 日	降雪日数 日	平均最高気温 °C	平均最低気温 °C	平均気温 °C	雨量 mm	雨天日数 日	降雪日数 日
1	22.4	17.2	25.6	152.9	11	—	32.4	17.2	25.6	152.9	11	—
2	33.1	16.1	25.7	166.6	8	—	33.1	16.1	25.7	166.6	8	—
3	26.2	16.1	22.3	155.9	15	—	29.5	16.1	23.2	175.5	14	—
4	23.3	6.2	16.2	163.7	5	2	23.2	6.4	16.2	163.7	6	2
5	20.8	3.6	13.1	4.5	2	9	20.8	3.5	13.2	4.5	2	9
6	19.8	5.2	13.2	39.2	8	9	22.5	11.8	17.7	64.9	7	2
7	21.3	8.7	15.8	205.2	13	2	22.3	9.9	17.3	112.3	9	1
8	25.8	12.1	19.8	159.0	13	—	23.3	10.1	17.7	29.4	6	1
9	27.4	16.7	22.5	182.3	14	—	22.6	9.1	17.3	216.1	12	4
10	29.3	17.5	23.6	133.0	12	—	27.0	15.2	22.3	333.4	13	—
11	28.5	16.2	24.1	112.8	6	—	31.4	19.2	26.6	56.7	10	—
12	34.3	17.4	27.6	133.4	4	—	33.0	18.3	27.3	183.3	8	—
合計 平均	26.0	12.6	20.8	1,808.3	111	22	28.7	12.7	20.8	1,709.2	96	19

2,000mm であって当国最多雨地域に属し、年間平均気温 20°C 以上である、従って当地は亜熱帯降雨型の農業圏にあるといえよう、

(3) 土地条件

ア. 地 形

当入植地は大波状の比較的起伏に富む地形を示し、全体的に北西部からパラナ河のある南東部にかけて傾斜して低くなっている。

標高は最高 348m、最低 99m であって地区内最大の比高は約 250m であるが全般的には比較的傾斜の多い地形といえる。(平均標高約 220m)

イ. 地質、土壌

当地区の高位部の平坦部では土壌一般に厚くラトソール(玄武岩を母材とする風化土壌である暗赤色ラテライト化土壌)が 5m~10m に達し、その玄武岩の破砕片又は風化の可成進んだ状態の岩石又は盤層が横たわっている、一方比較的地形の低平な地域(ピラボ川、マンドビジュ川の沿岸など)では一般にラトソールの土層薄く、平坦部にあっても時には礫交りの土壌が見られ、傾斜面にあつては表面近くに礫層、軽石又は岩盤が散見される、暗赤色ラテライト化土壌はブラジルでいわゆるテラロシヤといわれている土壌と同一のものであつて、暗赤色を呈し、表層は埴壤土又は埴土、下層は埴土で粘土粒子は一般に微粒である。

なお、概して森林下は膨軟、土壌構造も良く発達して角塊状を成し、そのため透水性は粘土含量が高いに拘らず一般に良い、土層は深く、通常 4~5m 以上であり、表層は腐植 3% 位、pH は 5~6 程度の弱酸性で可溶性の燐酸の含有は低い加里には一般に富む。

ウ、植 生

高地は林層が厚く、中には周囲6m、樹高20m近い巨木も存在する。樹種としてはグワタンブ、グワイカ、カナフィスト、ローレル、ラオ等が多く、用材としては硬材として鉄木ともいわれる有名なラパーチヨを始めセドロ、ローロネグロ、インシエンソがあるがその量は少い。グワタンブ、グワイカは軟材であるが家具材、板材等に用いられる。

低地部は林層が薄く灌木又は耐湿草本が繁茂している。

・ 水 利

地下水位は10m前後で土壤に透水性があるため雨水の滲透、保持は良く年間水位の変動は一般に少い。

地区内にはピラボ、マントビジュの両川がパラナ河に向ってほぼ直角に流入しているほか小溪流が無数にあり、一般に水量は豊富で集水面積も大であるため年間を通じ渇水することはない。

3. 入 植 者

(1) 入植者数

1961年8月2日、第1団26家族の入植を皮切りにその後9年間に331家族、1,780名が日本より入植した。しかし、開拓の途中で志ならずして倒れるものもあり、一時吹き

入植・退耕区分		昭和34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	
入	内地入植戸数	—	84	166	38	16	22	4	1	—	—	331
	" (員数)	—	(441)	(917)	(195)	(89)	(112)	(22)	(4)	—	—	(1,780)
	現地入植戸数	—	—	12	10	14	19	3	7	16	15	95
	(員数)	—	—	(43)	(29)	(38)	(34)	(9)	(24)	(36)	(37)	(250)
植	計	—	84	178	48	30	41	7	8	15	15	426
		—	(441)	(960)	(224)	(127)	(146)	(31)	(28)	(36)	(37)	(2,030)
退	内地入植戸数	—	—	—	4	1	2	29	14	14	14	78
	" (員数)	—	—	—	(15)	(4)	(10)	(134)	(73)	(74)	(70)	(380)
	現地入植戸数	—	—	—	—	—	—	1	7	4	1	13
	(員数)	—	—	—	—	—	—	(1)	(22)	(11)	(3)	(37)
耕	計	—	—	—	4	1	2	30	21	18	15	91
		—	—	—	(15)	(4)	(10)	(135)	(95)	(85)	(73)	(417)
43年度末現在戸数		—	84	178	44	29	39	-23	-13	-3	0	335
" (員数)		—	(441)	(960)	(209)	(123)	(136)	(-104)	(-67)	(-49)	(-36)	(1,613)
特 記 事 項		(1) 各年別、入植退耕の区分において示された員数は、出生、死亡の増減を含むものである。 (2) この調査は昭和43年度末を対象として行なったものである。 (3) 内地、現地入植戸数は、移住者名簿及び分譲台帳を参考とし、員数は在留届の個別調査によったものである。										

荒れたブエノス・アイレス旋風でアルゼンチンに転住する者もあり、又都市に出て商売を始めるものもあり、反面、結婚で分家独立するものも多く、結局、1969年3月末現在のアルトパラナ入植地における日本人の数は、335家族、1,613名である。

(2) 県人別動向

受入数のうち最も多いのが岩手県で続いて高知県、愛媛県の順となっている。

多数県はそれぞれ県人会組織をもち活動しているがすでに当地で他県人どうしが結婚し分家している例も数多くあり、後に記載している通り、当地で出生した子供も多数いるため、次第に県人的意識は薄らいで来ている。

4. 造成分譲状況

(1) 道路の状況

入植地内の道路総延長は、327.21km、そのうち移住者自身による自治組織（アルトパラナ自治会）が管理しているものが、134.6km、事業団の管理のもとにおかれているのが192.61kmである。

道路は、大きく分けて幹線と支線に区別されるが、幹線は幅員20m、総延長132.494kmであり、支線は幅員16m、総延長194.716kmとなっている。

幹線を横断しているピラボ川及びマンドビジュ川には、大橋梁が建設されており、前者はピラボ大橋と称せられ、アーチ型鉄筋コンクリート造りで全幅8.16m、橋長41.08mとなっており、1961年5月9日、エストロエスネル大統領臨席のもと、落成式が行なわれた。後者はマンドビジュ大橋で、方杖型木橋、全幅6m、橋長22.60mである。その外、各所に橋梁、暗渠が架設（埋設）されており、総数154を数えている。

雨が降るとテラロッシャ独特の微粒土のため、表面3～4cmのみやわらかくなり、水がそれ以下に浸透せずしたがって、自動車（勿論、ジープ・トラック）がスリップし、運転に相当の熟練を要する。

また乾いた日には自動車の通った後はモウモウたる赤い煙のように砂じんが舞い上り鼻の穴まで赤くなる。しかし、これらも移住地の風物の一つである。

(2) 分譲地（ロッテ）の状況

アルトパラナ入植地84,217haのうち、造成済のロッテは905で約27,105haであり、残余の土地は、日本からの新規入植者或いは既入植者の増反用として保留されている。

当地区の造成は、当初、正確な地形図が無く、殆んど手探りの状態にて行なっていたが、1964年、日本の国際航業K.K.により、航空写真測量が実施され、その成果と、その後、引き続き行なった実地踏査、土壌分析等により、地区の全貌が明確になり、未造成地区の地形、土壌状況もはっきりと掴めるに至った。

現在、当入植地建設基本計画制定中であり、近い将来、新規ロッテ造成も行なわれ、

日本より新移住者を迎えることとなる。

約3年前から、未造成地区に隣接して入植している人々や既に自分の土地を開拓しつつくした比較的初期に入植した人々、或いは、分家独立する人達の間に、所有ロッテよりの距離、土地の状況、今後の営農規模発展等のため、造成されていない土地の分譲希望が強くなりはじめ、1967年12ロッテ、1968年24ロッテの分譲を行なった。変わった例ではフラム入植地の新土居保広氏が息子の独立のため、やはり造成されていない地区を約720ha購入し、1968年度より住居を構え、大規模な大豆栽培を行なっている。今後も、このような大規模な分譲希望が増えて来る見込みである。

ロッテの造成分譲状況表

区分	造成ロッテ数	日本において分譲したロッテ	現地で分譲したロッテ	残 ロ ッ テ		計
				農耕可能地	農耕不適地	
一般ロッテ	905	269	245	141	250	391
未造成地区	6	—	38	—	—	—
大口分譲	1	—	1	—	—	—
合計	912	269	284	141	250	391

上表にある通り、 ロッテは391であり造成済ロッテの43%を占めているが、農耕可能ロッテの数は限られており、しかも、その中には近くに公共施設（学校、警察屯所等）がなく又入植者もないことから、陸の離島状の社会環境下にあるロッテもあり、現状では直ちに入植可能なロッテは極めて少ない。

従って今後、日本からの入植を行なう場合は、地味の豊かな未造成地区を対象として行なうことになる。

(注) 上表未造成地区のロッテ数及び分譲数にはジャガラサバ地区2ロッテを含む。

(3) ロッテの分譲価格

1ロッテの標準面積は30haで、一括払価格は邦価350,000円、現地価相当額は122,500Gsである。分割払の場合は、頭金として一括払価格の10%（標準面積の場合35,000円）を支払い、残金は9年据置5年均等年賦払（年賦額100,800円）となっており、総額539,000円、現地価にして約188,650Gsである。

(4) 地券の発給状況

各ロッテは分譲契約締結後、地券が発行されて、始めて自分の土地になるわけである。1960年から1964年までに分譲した262ロッテについては、1968年度末迄に地券を作成し、農業福祉院及び不動産税務所に登記完了した。1965年以降に分譲したロッテについては、1969年以内に地券を作成すべく現在手続中である。

(5) 市街地関係

アルトパラナ入植地の中に2つの市街予定地がある。

① ビラボ市街地

入植地の略中央に位置し幹線3号(国道予定線)及びビラボ川を中心とし、市街地の総面積は742haを予定している。この市街地には現在、事業団の管理事務所、診療所、警察本部、判事事務所、電話局、カトリック教会、自由メソジスト教会、アルトパラナ農協本所、アルトパラナ自治会事務所等の公共機関が既に存在しているが、今後も、市役所等の行政的機関、公共施設等の集中を計り名実ともに入植地のセンターとすべく計画している。

なお、ビラボ飛行場、共同墓地もこの市街地内に建設されている外、前述のビラボ大橋も市街地内に位置している。

分譲地としては、商業区、居住区、小農園に分類されているが1969年3月末現在、商住宅区85、小農園24ロッテの造成を了し、そのうち35件が分譲済である。

② カーレンズ市街地

パラナ河沿いのカーレンズ港を入植者の生産物搬出港として建設し、その周辺に商工業を主とした市街地を建設する計画である。現在造成は行なっていない、総面積は235haの予定である。

5. 開拓状況

(1) 開拓の進め方

開拓の第一歩は鬱蒼と繁茂する原始林を伐採することから始まる。まず巨木を伐採するための準備として、樹木の間に密生する灌木や竹を刈取る。これを「下刈」という。次に一本一本、大木を斧や鋸で切り倒していく。下刈り大木の伐採をひっくるめて、いわゆる「山伐り」といっている。

1961年から1963年頃の入植当初は、現地の言葉も通じないまま自分で山伐りを行なってきたが、近年になって現地人の人夫に請負いでやらせることが多くなった。請負の場合、山伐りだけで1ha 3,000ガラニーが相場である。

伐った山は、乾燥の早い夏の場合は、1ヶ月間、乾燥の遅い冬は2ヶ月から3ヶ月間放置し、乾き上るのをまって火をつける。これを「山焼き」という。山焼きの時期になると入植地全体が夜でも薄明るく感じられ、5km~10km先でも竹のはせる音や樹木の燃える音がきこえる。

山伐り、山焼きは、普通夏に行なう夏山と冬に行なう冬山があり、夏山は、晩夏から冬にかけて、2~3回の「寄焼き」(燃え残りの木を寄せ集めて火をつけること)を行ない翌年の1期マيس(とうもろこし)の播種にそなえる。冬山は晩冬から初夏にかけて寄焼きを行ない、中生或いは、中晩生の大豆作付に間に合わせる。夏山、冬山のいずれにしても、山伐り後3年間は畜力、機械力を圃場へ入れることは困難であり、人力による農法に頼らざるを得ない。又その間、作物を栽培していない冬期(5月~7月)を

利用して、たんねんに寄焼きが行なわれる、山伐り後、約4年経過して始めて、牛犁が使われる。なお、この時期より小型耕耘機による耕起も可能になってくる。

油桐、柑橘等の永年作物を植える場合も、3～4年間、短期作物を栽培した後に作付けされるのが一般に行なわれている農法である、しかし、近年油桐の値が安いため、1966年以降に伐採された耕地は殆んど短期作（大豆、とうもろこし等）圃場として利用されている。

(2) 開拓面積

アルトパラナ入植地における開拓総面積は約7,000ha、うち永年作園約4,000ha、牧草地約800ha、短期作圃場約2,000ha、その他再生林地等が約200haである。

土地利用別開拓面積 1969.3末現在

単位：ha

永年作園						短期作園	その他	合計		
油		桐				柑橘、 ジュエル バ等	牧草地		大豆、 とうもろ こし等	宅地、再 成林地等
4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	計					
200	800	1,500	700	400	3,600	400	800	2,000	200	7,000

(3) 土地利用状況

アルトパラナ入植地における栽培作物は、前述の通り、永年作物では油桐、短期作物では、大豆、とうもろこし、棉、水稻、雑豆が主で殆んど農家がこれらを組合わせて栽培している。又、近年肉牛飼育のための造成草地も漸次増えて来ている。なお、作物は、比較的限定された形で導入されているというものの、個々の利用形態はそれぞれ差異があり、大きく分類すると、ピラポ州以西の初期入植者は、その殆んどが所有ロッテの70%以上の油桐園に占められており、短期作圃場は1ロッテ当り3ha～10haにとどまっている。一方、中期、ないし後期に入植したピラポ州以東の入植者は、営農の主体が短期作物となっている、1968年より養蚕導入のための桑の栽培が始まった、年6回の蚕の飼育は可能であり目下養蚕農家1戸平均2haで総面積80ha程度であるが、明年は更に植付面積が倍増する予定である。

(4) 土地拡大への意欲

入植後、8～9年を経過し、所有地の大半を開発しつくした入植者にとり、特に開拓した耕地の殆んどを油桐園で占められている初期入植者にとっては新たに土地を求めることが、営農安定上或いは、経営拡大の先決問題となっている。又、すでに、まとまった短期作園を所有する農家も更に営農規模を拡大したい意向は強く、その現象が近年特に強くあらわれ、一種の土地ブームとなっている。1967年度以降の土地分譲はすべて増反用若しくは分家独立のために行なつたものであるが、その件数は次の通りである。

入植当初は、1戸当り、1ロッテ30haあれば十分と考えられていたが、当国の如き

1967年度以降の土地分譲実績

	1967年度	1968年度	1969年度 (7月末現在)	合計
分譲ロッテ数	66	83	24	173

低開発農業国においては、第1次生産物の収量増加を計ることが、農家にとっても、その経営安定、生活向上のため、不可欠となっており、100ha 農業が当国における標準農家といわれるようになった、最近になり本入植地においても、経営能力のあるものは100ha 農業を日ざすようになり、普通2ロッテ、多いものでは4ロッテ120ha とその規模を拡大しつつある、大規模経営の必要性は日本の農地と異なって単位面積当りの土地の生産性の低いことにあり、1969年現在、1年間の生産額を平均すると、油桐園で1ha 当り 8,000~10,000Gs (邦価約 23,000~29,000円)、とうもろこし、大豆の二期作を行なう短期作園で 18,000Gs (邦価約 52,000円) にすぎない、邦価に換算して 100万円の農業を行なっている農家は数多くあり、20ha の短期作園を持てば、それで事は足りるが、日系人のたくましい開拓意欲はいまや、邦価 300万円の粗収入を要求して来つつある。

6. 入植地内の生産販売状況

(1) 主な生産物の量および販売額

主な生産物の量と販売額の推移は次表の通りである、ここ1、2年生産量は伸びているが、生産額が伸びていないのは、生産構造が変わったためである。従来比較的大量に栽培されていた棉花が、病害虫の発生、単価は高いが栽培経費も相当に要し、そのため収益性が小さい、或いは天候によって作柄が極端に左右される等の理由により、近年急激に減少し、それに代って棉花に比し販売単価は低い、収益性の高い大豆の栽培が急増した、従って全体の生産額の絶対量の増加は見られないが、農業所得は年々増加して来ている。

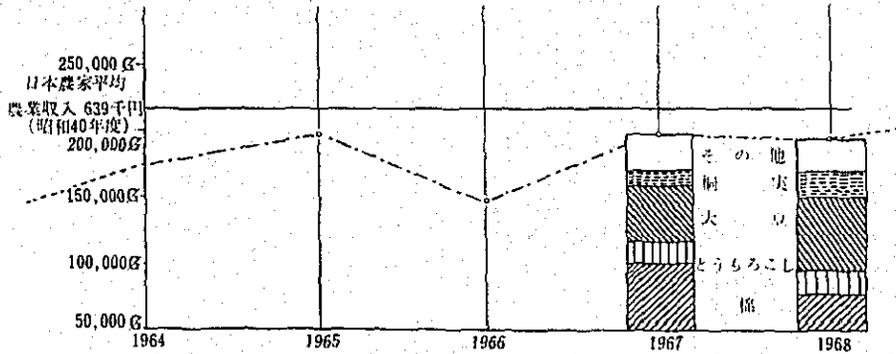
アルトバラナ入植地日本人入植者農業生産高とアルトバラナ農協販売取扱高

(生産高及び販売取扱高とも、その年の3月から翌年の2月までの統計数字である)

単位:Gs

年次	農 業 生 産 高			アルトバラナ農協販売取扱高		
	総 額	農家戸数	1戸平均	総 額	組合員数	1組合員平均
1964	52,440,000	304	172,500	32,619,000	267	122,150
1965	66,755,000	338	197,500	38,541,000	233	164,450
1966	49,245,000	355	147,000	22,139,000	212	104,450
1967	63,200,000	320	197,500	28,389,000	202	140,550
1968	63,961,000	334	191,500	27,466,000	200	137,350
平均	59,120,200	326.2	181,250	29,830,800	222.8	133,900

アルトバラナ入植地日本人入植者！戸平均農業生産高の推移と品目別生産高



アルトバラナ入植地1987年、1988年の品目別農業生産高及び農協販売取扱高

品 目	平均 単 価	1987 年				1988 年				
		農業生産高		アルトバラ ナ農協販売 取扱高		農業生産高		アルトバラ ナ農協販売 取扱高		
		数量 (ton)	金額 (千円)	数量 (ton)	金額 (千円)	数量 (ton)	金額 (千円)	数量 (ton)	金額 (千円)	
棉花	組 合 員		895	13,965	814	12,701	415	7,669	376	6,948
	組合員外推計	16.60/kg	522	8,143	—	—	14.48/kg	278	5,137	—
	全農家推計		1,417	22,109	—	—	693	12,806	—	—
とらも ろこし	組 合 員		1,235	4,560	950	3,507	987	4,284	759	3,297
	組合員外推計	3.69/kg	721	2,660	—	—	4.34/kg	661	2,868	—
	全農家推計		1,956	7,220	—	—	1,648	7,152	—	—
大豆	組 合 員		1,339	11,160	1,134	9,460	1,803	15,181	1,527	12,861
	組合員外推計	8.33/kg	782	6,514	—	—	8.42/kg	1,208	10,171	—
	全農家推計		2,121	17,674	—	—	3,011	25,352	—	—
桐 実	組 合 員		882	2,152	882	2,152	2,091	4,082	2,091	4,082
	組合員外推計	2.44/kg	515	1,256	—	—	1.95/kg	1,401	2,731	—
	全農家推計		1,397	3,408	—	—	3,492	6,813	—	—
その他	組 合 員		—	8,068	—	579	—	7,458	—	362
	組合員外推計		—	4,732	—	—	—	4,380	—	—
	全農家推計		—	12,790	—	—	—	11,838	—	—
合 計	組 合 員		—	38,885	—	28,388	—	38,874	—	27,650
	組合員外推計		—	23,305	—	—	—	25,287	—	—
	全農家推計		—	63,200	—	—	—	63,881	—	—

(2) 販売ルート

アルトバラナ農業協同組合員の農産物は、農協がまとめて委託販売を行なっているが、主としてエンカルナシオンの業者に販売されている。農産物のうち、桐実、大豆、

ともろこし、棉花については特に指定農産物として必ず農協経由販売されることとなっている、なお、桐実、大豆等の油料作物については1967年よりアルトバラナ入植地内に CAPSA 第3搾油工場が建設されたことから、同工場と取引を行なうようになった。また、1970年より操業開始が計画されている CAICISA (在、エンカルナシオン市、バクア地区)の本格的買付が始まれば、同社との取引も行なわれることとなる。

組合員外の生産者は個々に業者を物色し、出荷しているが、組織による販売でないため、ここ2~3年前頃より次第に販売価格の不利な面が現われて来るようになった。

主な生産物の販売ルート

生産物名	主な販売先	備考
桐実	CAPSA ビラボ工場	工場渡し
大豆	CAPSA ビラボ工場	"
ともろこし	Jorge Borj エンカルナシオン	
棉花	Pilar	

7. 営農の基本類型

現在の営農類型

現在の営農類型は大きく次の4項に分けられる、但し、この類型は理想的な基本類型ではなく、理想形態に向うための一段階として現在行なわれている形態である。

(1) 永年作主体類型

初期入植者の殆んどがこれに該当する、永年作物のうち換金用のものはその95%以上が油桐である、前にも記したが初期入植の頃は1区割 30ha とし道路の造成された地区から順次入植したため、近隣に未分譲の土地がなく、いわゆる満植の状態で分譲された。しかし与えられた 30ha の土地は9年経過した現在その殆んどが開発つくされておき、しかも当時の油桐景気もあって既耕地の70%以上が油桐園になっている。

この類型は桐実の安価な現在、資産の動きが少なく、粗収入の面から見ると中位ないし下位の農家が多い、最近これを脱皮するため、土地の交換分合の意味も含み、現在持っている耕地を近隣に売却あるいは委託管理させ、入植地内に新しい土地を求めて転出する姿が次第にあらわれて来つつある。

(2) 短期作主体類型

すでに桐実価格値下の兆のあらわれた時期である中期ないし後期に入植した人々の中に多く見受けられる。

入植歴が浅いため開畑面積はいまだ少ないが、所有土地の中に開畑可能な原始林がまだ多分に存在する、又、初期に入植した人々の轍を踏むまいとの考えのもとに、密入植しておらず点在しているため、近隣にも比較的購入可能な土地がある場合が多い、但

し、良い土地は殆んど売れしまっているため、残された土地が比較的生産性の低い事が難点であるが、第1類型にくらべ、まだいくぶんのゆとりはあるし、未造成地区にも距離的に近いのが強みである。

現在、農業機械（耕耘機、トラクター等）を購入し、営農規模の拡大と省力化に意欲をもやしているのも、この類型の中に多い、資金の動きも、当地における類型の中で最も大きく、再生産投資としての原始林の開畑も年々増加し、それにつれて生産量も増大している。しかし現在では短期作の主要作物である大豆の栽培上の問題（収穫期に雨が深い）及びこの単価が若干変動する事等により、その性格を割合安定性のないものとしている。

将来、機械力の導入による大規模経営による品質の画一化、向上とともに生産が進められる事により生産者側の力を養い業者との交渉による生産物単価の値上げも考えられる。省力化によるコストダウンも可能であろう。

(3) 牧畜主体類型

現在、当地においては、入植歴が浅いため、当該類型の数は僅か数例を算えるにすぎないが、将来は芭国あるいは近隣諸国の需要の関係から、あるいは個々の農家の好みの面からも相当多数の者が当該の営農形態を取ると思われる。現在はまだ増殖の段階であり軌道に乗った販売体制ができていないため、資金の調達には永年作あるいは短期作に頼らざるを得ないが、資産は年を追って増大している。近い将来、ある程度数がまとまった場合、自ずから販売ルートが開けて来るであろう。

今後有畜営農形態が増加する要素は強い。

(4) その他の類型

その他の類型を作物別に分けると雑多なものである。例えば養蜂、水稲、そ菜、養鶏、植林等の作物を営農の柱としてとり入れている農家があちこちに点在する。このうち植林はまだ販売態勢に入っていないため、第1、第2類型と併合して行なっている場合が多い。有望なものとしては、台湾桐、パナ松があげられる。

今年になって増加したのが、ISEPSA の進出に伴う養蚕農家である。昨年は30戸の農家が選ばれ、すでに1戸当り2haから4haの桑園を造成している。又、今年も24戸の農家が養蚕を行なうべく準備を進めている。養蚕の収益性いかんによっては今後さらに増加するであろう。

1968農年における 類型 1 1960.10 入植

1. 土地利用状況

区分	水田	短期作圃	永年作圃	宅地等	計
面積	2ha	8	18	2	30ha

2. 作物別農業粗収入

1968農年における 類型 2 1962.7入植

1. 土地利用状況

区分	短期作圃	永年作圃	牧野	宅地等	小計	未開拓地	合計
面積	17.5	8.5	3.5	0.5	30	30	60ha

2. 作物別農業粗収入

作物	作付面積 ha	年間収量 ton	年間販売量 ton	売上高 円
油桐	18	26	26	52,000
大豆	6	6.6	6.6	100,000
とうもろこし	5	9.6	9	72,000
米	12 (間作)	15	14	44,000
計	2	4	2	40,000
				308,000

作物	作付面積 ha	年間収量 ton	年間販売量 ton	売上高 円
油桐	8.5	16	16	32,000
大豆	17.5	35	34	290,000
とうもろこし	8.5 (間作)	12	11	40,000
計				382,000

3. 農業経常費	104,000Gs
4. 固定財購入	特になし
5. 家計向現金支出	90,000Gs
6. 農外現金収入、支出	特になし
7. 農業所得	204,000Gs
8. 農家経済余剰	114,000Gs

3. 農業経常費	107,000Gs
4. 固定財購入	12,000・隣接ロッテ購入頭金支払い。 45,000・大豆脱穀購入
5. 家計向現金支出	75,000Gs
6. 農外現金収入、支出	特になし
7. 農業所得	255,000Gs
8. 農家経済余剰	123,000Gs

8. 上位農家の模範的営農例と今後の方向

(1) 模範例

篤農家シリーズ～安部米蔵さんを訪ねて

○家族構成

戸主	安部 米蔵	1911. 6. 1	生	高小卒
妻	〃 〃	12. 8. 1	〃	〃
長男	〃 徹	40. 4. 15	〃	農高中退
二男	〃 洋	43. 3. 30	〃	中卒
二女	〃 道子	46. 10. 14	〃	中, 中退, 芭小卒
三男	〃 誠	51. 10. 13	〃	芭中3在学(寄宿制)
三女	〃 直子	54. 12. 9	〃	1〃 (〃)

○本 籍 地 宮城県仙台市北見町67

○渡航前住所 北海道紋別郡雄武町

○入植地区(現住所) アルトパラナ入植地ピラボ13K地区

○所有ロッテ

98ha, 0413m². ロッテの名義は戸主、長男、二男(概ね各30ha)内地分譲(渡航時)30ha, 現地分譲68ha

○渡航年月日 1961. 8. 4 横浜 あるぜんちな丸

○携行資金 現地着400US\$ 約14万円, 約5Gs

○乗船まで

1952年5月, 仙台より北海道, 雄武開拓地(酪農)へ入植。所有耕地12ha, 乳牛4頭, 育成牛3頭を飼育, 馬鈴薯, 小麦, 大麦, えん麦, とうもろこしを栽培, 気候は寒冷で重粘土質の泥炭地, 傾斜が多く強酸性という悪条件の中で1961年8月まで約10年間開拓に従事するも成果はあがらず, 移住するために処分した財産から負債を差し引いた金額は約600ドル21万円であった。移住を決意した理由の第1は経済的なものである。

第2の理由は宗教的なものである。安部さんはカトリック信者であるが教会が遠かった。紋別市にある教会まで汽車で片道2時間半はたっぷりかかった。教会になかなかでかけられないのが熟

心な信者である安部さんには苦痛だった。

第3の理由は、当時日本中を風靡した共同経営構想について行けないということであった。雄武開拓地も例外でなかった。

農林省の直轄によるモデル酪農共同経営地区に指定され、全面共同、報酬は働きに応じた月給制度、資産はすべて供出というやり方に、自分の力で自分の農業をやりたいという安部さんの気持ちがついていけなかった。

こんなさなかに、安部さんを含め、雄武町より5戸が移住を希望した。全員第1希望パラグアイ、第2希望ボリビアと足並みをそろえた。米蔵さんが目の治療をするため故郷の仙台へ掛っている間に決定通知が来た。携行資金が少ないという理由で5戸とも行先はボリビアになっていた。安部さんを除く4戸はボリビアへ発っていった。安部さん1家は主人が不在のため1船遅れた。

遅れた間の1ヶ月間が安部さん1家の行先をかえた。

土地無償が嫌だった。土地無償の雄武開拓地で10年苦勞した。土地代を取る土地へ入りたかったという。

1961年8月4日、結婚している長女を残し1家7人が横浜を出帆した。

○入植後現在まで

内地で契約した Manzana D No. 31 (30ha 0051m²) に入植、初年度6haのモンテを伐って家を建てた。

3年後長男のために1ロッテ (Manzana D No. 107, 38ha 0632m²) を増反し、1部3haほどを公共用地に提供して、レンガ造の教会を建てた。

昨年(1968年6月)次男に1ロッテ (Manzana C No. 172, 30ha) 購入した。3ロッテの開墾面積は71ha、内訳は、油桐22ha、大豆42ha、マيس、棉等7haとなっている。1昨年頃よりコンスタントに50万Gs(邦貨約140万円)以上の租収入をあげるようになった。

○今後の経営

現在の経営内容のまま200haは持ちたいと米蔵さんがいった。小さいな、と長男の徹さんがいう。2,000ha位はやりたい。柑橘、紅茶、油桐を主体とし、これら永年作園が成園になるまでの間、これの造成管理のため短期間作の大豆をつくる。少くとも3人の兄弟の協力がある。やはり他人ではだめ、血のつながりが必要だという。

目標期間はどれくらいか、との質問に、一生かかるでしょうと29才の徹さんが答えた。

○雑談

ここまでこぎつけた原動力は

宗教の力

生活の喜びとするものは

働いて夕食をとり、風呂に入って、本を読む

豊かな食生活、時間をかけてゆっくり食べる。

家の周囲を花でうめる。

教会での信者との話

※安部さん1家は誰も酒を飲まない。(飲めない)家のまわりにある果物の種類をあげると、ミカン、桃、柿、リンゴ、バナナ、梨、パイナップル、イチヂク、ブドウ。今年1年で豚を42頭たべた。

つらかった時は、

北海道の開拓にくらべると、青ダクミの上で仕事をしているようなものだ。ただ収穫期になると、夜中の2時~3時にランプをつけて大豆を積む、辛いというより、蛇が恐い。

事業団への注文は、

ここで農業をやる自信がついた。大規模にやるための資金の融通をお願いしたい。

来て良かったと思うか。

すべて神に感謝している。北海道時代苦しいと思ったが、仙台から直接ここに来ていたらずいぶん苦労しただろう。

北海道開拓はここに来るための神の配慮による試練の期間だった。

開畑及び資産取得状況

年度	ロッテ (ha)				固定資産 (農機具)		
	D-31	D-107	C-172	計	住宅	倉庫	農機具
1961	6			6	平屋70m ²		脱穀機
62	24			30		48m ²	
63				30			
64		9		39		60m ²	脱粒機
65		15		54			耕耘機
66		7		61			チェーンソー、動噴
67				61			
68			10	71			
69				71	二階建94m ²	61年の住宅倉庫に転用	
計	30	31	10	71			
評価額 (Gs)				64万	20万	25万	45万

バランスシート 1969.5.31現在 (1961.8~1969.6)

単位:千Gs

資産の部			負債の部		
項目	内訳	金額	項目	内訳	金額
(流動資産)			(負債)		
現金		10	未払金	土地代3ロッテ残金	561
貯蔵品	大豆 84ton	588		事業団長期融資	85
	油桐 36ton	72		銀行 "	400
	その他雑作	80	原価償却引当金	建物(耐用10年)	189
(固定資産)				農機具 (" 5年)	230
土地	3ロッテ土地代	698		構築物 (" 5年)	15
	開畑71ha, @9,000.-	640		什器 (" 5年)	50
建物	住宅1, 倉庫3	450	(資本)		
農機具	耕耘機エンジン等	450	資本金	携行資金 400\$	50
構築物	井戸, 豚舎等	30			
什器	冷蔵庫, 応接セット等	100	当期利益	1961~1969. 期間益	1,915
樹木	油桐 22ha	352			
	樹果2,500本, @50.-	125			
合計		3,485			3,485

今年1年間 (1968.8.1~1969.7.31) の収支

(1部予想)

収入

油桐 36ton @ 2Gs/kg	72,000Gs
大豆 84ton @ 7 "	588,000 "
マيس, 棉等	80,000 "
計	740,000 "

支 出

人 夫 賃	200,000Gs
機械維持費	40,000 "
家計費 (2子の教育費を含む)	120,000 "
固定資産取得 (住宅新築)	200,000 "
借入金返済	30,000 "
計	590,000 "

(2) 今後の方向

1967農年のアルトパラナ入植地における農協を通して販売した農産物の一戸当り平均販売高は14万Gsである。(農協調べ) 1968農年は大豆の豊作もあって一戸当り平均予想粗収入は20万Gsになると思われる。

アルトパラナ入植地においては、営農改善の基本的な問題として、農家所得の向上があるが、第1に考えられることは農業粗収入の絶対額の増大であり、これの施策として雑作経営規模の拡大、油桐園の積極的管理、養蚕の導入等があげられる。

第2はコストダウンである。従来行なわれて来た人力(人夫)中心の農業法から脱皮し畜力あるいは機械力による農業を行なう事により極力コストダウンにつながる省力化を計ることが必要である。

現在当地には耕耘機32台、トラクター45HP~60HPのもの9台を所有しているが原始林開拓による耕地であるため、根株倒木等が圃場の中に点在し、これらの農耕機械が充分に働く事が出来ない状態にある。

この状態を解決するため、1969年度より現在事業団にあるブルトーザD7 1台と新しく導入するトラクター60° 1台をアルトパラナ農協に無償貸与し機械の入る事のできる耕地(熟畑)の造成に本格的に取りくむことになった。

9. 営農技術上の問題

(1) 主作物の主な病虫害、障害

作物名	病 気	害 虫	物理的障害
油 桐	白紋羽, 苗腰おれ病	芯喰虫, こがね虫の幼虫, 蟻	風による折損
とうもろこし	黒穂病	あおむし	晩霜による葉焼
大 豆	斑点病, 褐紋病, 炭疽病, 黒痘病, サビ病, 葉焼病, 紫斑病, いしゆく病, 細菌性はんてん病	こがね虫, あおむし, バックまめはんちょう, 芯喰虫	
棉 花	角点病, 炭疽病, 輪紋病, 根ぐされ病, 黒斑病	棉あぶら虫, ラカルタロサグ, あおむし, 線虫, あかみ虫	
い ね	いもち病, ごまはがれ病	うんか, かうばえ, はもぐりはえ	

(2) 優良新品種の導入と在来種の改良

主幹作物である大豆、とうもろこしの品種は、在来種の優良品種が栽培されているが、これらの品種は現在の営農方法に立脚しての優良品種であり、将来大型農業機械の導入によって、更に改良又は新品種導入の必要がある。品種の改良導入についてはアルトパラナ農場が全面的に行なっている。

現在、当地で優良作物と思われるものは、油料作物として、ナクネ、ゴマ、ヒマワリ等、香料作物としてはユーカリを始め数種があり、現在農場で試作されている。

10. 雇用労働の需給状況

(1) 人夫の需給状況

近年、単純労働力としての人夫の数は急激に減少している。原因としては、芭国の自作農奨励策により、小面積ではあるが、自分の土地を所有し、自立した農業を行ない始めたためである。自分の耕地の忙がしくない時は仕事を求めて流入して来るが、もともと栽培作物が同じであるため、日本人農家の農繁期は彼等の農繁期であって、必要な時期に雇出出来ず、現在の人力に頼る営農を行なう場合どうしても、日本人農家の仕事がワテンボ遅れることになる。労働力を最も必要とする播種、収穫の時期を逸することは農家にとって、致命的な問題であるため、少い人夫の奪い合いを行ない、いたずらに日本人同志が労賃を引き上げる場合が多い。

今後、安易に且つ、安価な労働力の確保は、更にむずかしくなる事が予想され、これに取って替えるものとして農業機械及び畜力の利用が飛躍的に増大する可能性が大きい。

(2) 人夫の就労条件

仕事の種類は主に耕起、播種、除草、収穫、山伐り等である。牛犁による耕起と山伐請負いで行なわれることが多く、耕起は1ha 1,200Gs、山伐りは1ha 3,000Gsが相場となっている。

その他の一般農作業は1日160°~180。で雇用使役しているが、収穫のうち、桐実拾いは1袋当り(20kg~25kg入り程度)4Gs~5Gs、桐つみは、キロ当り3.50Gs~4.50Gsで請負わせている。又、人夫の就労に際しては、作業上不測の事故(傷害、病氣等)に備え、この国の定めた労働法規に準じ、雇用主13.5%、労務者6%(労務者賃金に対する)の掛金をPrevicion Social(社会保険)に支払わねばならない。

なお、人夫はこの外、印紙代として1%の負担をしているが、これらのことは、労使間相互に必要以上の危険負担の防止に役立っている。

(3) 農耕機械の種類及び所有数量

耕 転 機

Marca	数量	価 格	購 入 方 法	備 考
ク ボ ク	12	180,000.—	農協, 免税	8 IP ローター
イ セ キ	13	160,000.—	" "	5 IP ローター
ホ ン グ	4	日本より携行		ガソリン
ア グ リ ア	3	320,000.—	現地商社	12IP~14IP ローター

トラクター

Marca	数量	価 格	購 入 方 法	備 考
インターナショナル	1	680,000.—	現地商社, 免税	ディスクハロウ, ブラウ付60IP
フ ェ ー ル	1	中古		
マ ー シ ー	3	{ 680,000.— 760,000.—	現地, 農協, 免税	" " {45IP 60IP
ボ ル ボ	1	695,000.—	農協, 免税	ローター, ブラウ付 45IP

(4) 所有の傾向

一昨年から昨年にかけて、耕転機が大量に導入された、特に油桐園の中耕除草、水田の耕起には、威力を発揮している。しかし、大面積の雑作圃場を管理する場合、10IP以下の耕転機では手がまわらないため（8IPの耕転機の場合は、約実面積 20ha が限度と考えられる）昨年よりは、45IP以上のトラクター導入の気運が急激に盛り上がりつつある。一方では、営農の機械化による大規模雑作（大豆）栽培問題について、アルトパラナ農協が熟畑の整備いわゆるブルドーザーによる抜根整地へのりだしており、ますます大型機械化農業に対する関心が深まってきている。

ただ、現在では、営農成績のよい従って大面積所有の農家が個人でトラクターを所有しているに過ぎないが今後、グループによる所有若しくは、団体（含農協）による機械賃貸方式等の導入等によって大型トラクターの所有が増えて来るものと思われる。

11. 農業協同組合の活動

(1) 事業の概要

現在、農協組合員 202 名でその取扱っている事業は、信用、販売、運輸、購買の 4 部門である。

① 信用事業

1968年度（1968年3月～1969年2月）に、従来農機具購入資金、営農資金等事業団より借受けていた資金を組合員に再貸付していた、いわゆる転貸融資を、事業団の個人への直貸に切替える措置を行なったため、信用部門は組合の自己資産により運営されるようになった。現在、短期営農資金（主として収穫資金）の貸出しを行なっており、金利は日歩 4 センチモ、1 戸当りの貸出限度は 10 万ガラニー、運用可能な資金は

500万ガラニーである。

② 販売事業

1968年度における販売実績は次表の通りであり、組合の受取手数料収入は3.5%、金額にして965,000ガラニーであった。

品 目	出 荷 量 (kg)	平均単価 (Gs)	販売金額 (Gs)
棉 花	375,654.—	18.50	6,947,698.—
大 豆	1,526,730.—	8.42	12,861,273.—
とうもろこし	758,553.—	4.35	3,296,816.—
油 桐 実	2,090,623.—	—	4,081,532.—
雑 豆	9,853.—	8.48	83,552.—
落 花 生	6,024.—	10.17	61,288.—
小 麦	3,311.—	10.34	34,248.—
豚 豚	7,432.—	23.60	175,356.—
豚 脂	182.—	40.—	7,280.—

③ 運輸事業

1969年7月末現在、農協の所有する車輛は下表の通りである。なお、1968年度における当部門の収支は約10万ガラニーの黒字となっている。

区 分	内 訳	購入年月日	備 考
ト ラ ッ ク	ボルボ 6 屯車	1968年 8 月	事業団よりの借入車輛
"	" "	"	
"	トヨタ "	"	
"	" "	"	
ジ ー プ	"	1968年 9 月	
オ ー ト バ イ	ホンダ	1968年 4 月	

④ 購買事業

生活物資は、各地区にある5実行組合（アカカラジャ 23km, 同 17km, ピラボ 22km, 同 13km, カーレンズ 7 km）が独立採算制で取扱っている。アルトパラナ農協自身の取扱い品目は営農用のものが主で取扱量は極めて少ない。主な取扱品目は地下足袋、農薬、麻袋、書籍及び若干の農機具等である。

⑤ その他

新規事業として、養蚕事業及び耕地整備と機械化営農のための機械利用事業が取り上げられつつある。

12. 営 農 資 金

(1) 事業団融資

① 条 件

1戸当り最高限度180万円とし、長期、短期の2種類がある。

長期融資は最長期間8年（そのうち、据置期間最高4年）であり、金利は年5%である。

短期融資は据置がなく、期間は18ヶ月を限度とする。金利は長期融資と同じく年5%である。

② 利用状況

320戸の移住者が利用し、平均一戸当り、約20万Gsを営農資金として使用している。最近営農規模の拡大につれ、一件当りの資金の絶対額が大きくなってきており、一戸当りの限度額内では十分な資金手当てが出来ない面が現われて来ている。後に述べるように、事業団による資金手当ては未だ営農安定期に達していないこの入植地では、不足気味のため、農家は、現地の金融機関を相当利用している。しかし年9%ないし12%の金利であるため、時によっては生産性の低い農業ではこれに追いつけないことがあり、やはり低利の事業団融資は魅力が大きい模様である。

又、入植当初と異なり、現地の農法にも馴れ、借入資金の使途が以前にくらべ非常に有効になっていることも見逃がせない事実である。

(2) 現地金融機関による融資

① 銀行融資

アルトパラナ入植者が、利用している現地金融機関は主に Banco de Foment（パ国勸業銀行）である。

金利は年9%、貸出期間は長いもので4年間である。

収穫資金のように短期間に必要な資金を一時的に利用している場合が多い。

Banco de Foment が当入植地に貸付している金額は約800万Gsである。

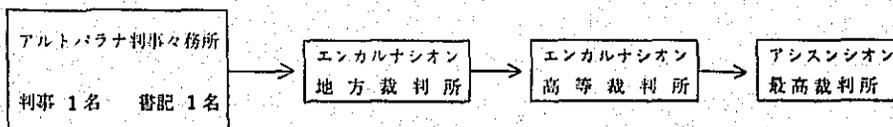
② 農協の貸付

農協の項で記したとおり、短期営農資金のみを取扱っている。運用している資金の額は約500万Gsである。

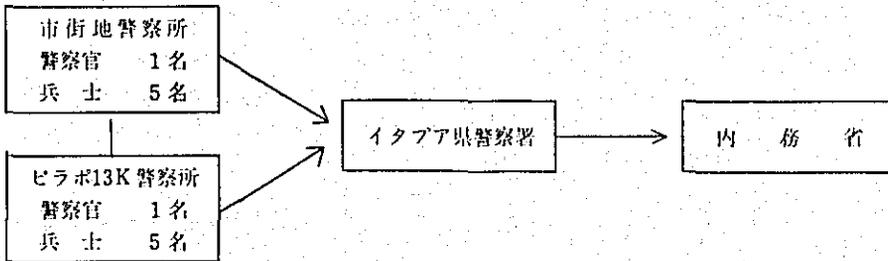
13. 入植地の主な機関と活動状況

(1) 国の法令に基づく組織と上部組織へのつながり

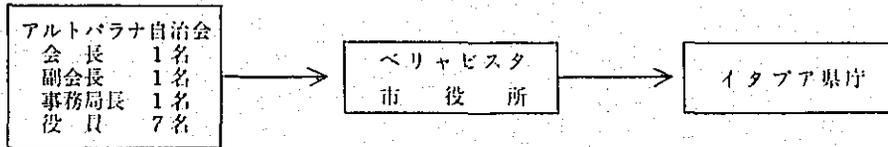
ア. 裁判所関係



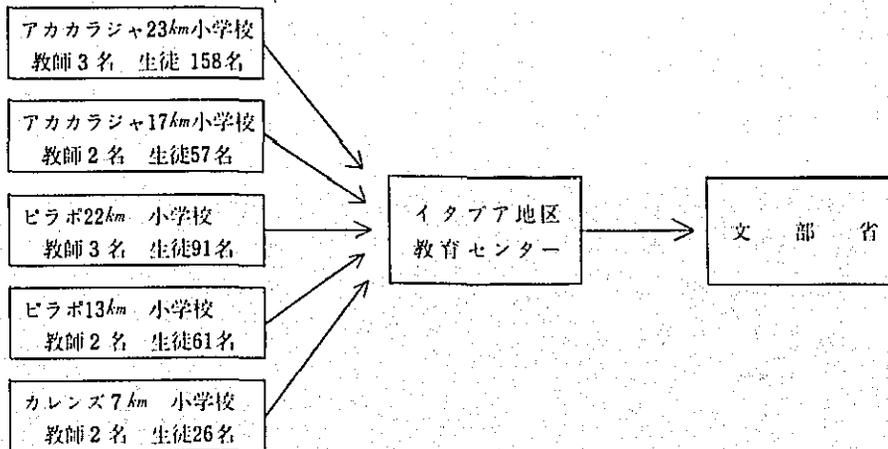
イ、警察関係



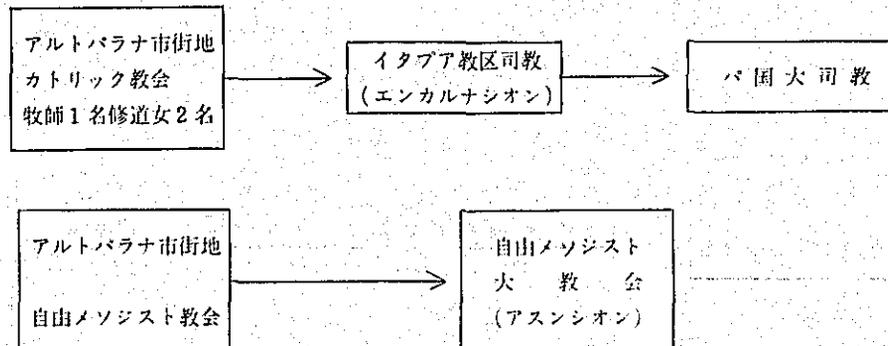
ウ、地方公共団体



エ、教育関係



(2) 現地宗教組織



その他、日本人間だけの宗教活動として、創価学会、天理教、PL教団等があり、それぞれ独自の活動を行なっている。

(3) 事業団関係機関

(イ) アルトパラナ事業所

所長1名、職員6名、雇員2名、オペレーター3名により構成され、市街地に事務所を置いている。

主な業務は融資、土地分譲、測量、道路造成補修、援護、生活相談、営農相談等であるが、現場業務の特色として、夫婦ゲンカの仲裁から、こそ泥の逮捕、パラグアイ人娼婦の取締りまで、いわゆる、移住地内のことなら何から何まで事業所が世話をやくことになる。

(ロ) アルトパラナ診療所

事業所の管轄下にあり、日本から派遣された医師2名と現地採用の看護婦4名、運転手(事務を兼ねる)1名、炊事婦1名で構成され、事業所から500m程離れた市街地に位置している。

年間延診療件数約4,000件(現住民、近隣移住地のドイツ人等含む)

(ハ) アルトパラナ農場

場長1名、職員1名、雇員3名の構成により100haの圃場と事務所を事業所から約4km離れたピラポ22km地区に置いている。

主な業務は営農指導、営農に関する訓練講習、作物の試験、優良種苗の配布、展示等、いわゆる、現地営農に関する知識、技術の殿堂である。なお、一昨年の農場では前述の養蚕事業を前提として、始めてブラジルより桑苗を導入し移住者に配布した。

(ニ) アルトパラナ農業協同組合

既述

(ホ) 民間会社、他

○CAPSA

パ国における最大の搾油会社の第3工場が、市街地より3km離れたピラポ川添いに一般農耕地を買取り、1968年操業を開始した。現在は3交替による24時間操業を行なっており、日産処理能力は油桐120ton、大豆50tonである。ここで生産された油は移住地内にあるカレンズ港より船でパラナ河を下り、アスンシオンに運ばれている。

○パラグアイ絹糸工業 K. K. (ISEPSA)

片倉工業と伊藤忠の合同出資による日本からの進出企業である、資本金は1,500万ガラニース(邦貨約4,500万円)で、現在アルトパラナ市街地に乾繭工場を建設中である。

操業開始は1970年2月の予定で、生マユの処理能力は日産10tonである。将来

移住者による生マユ生産量が年産 1,000ton になった時点で製糸工場を建設する予定であり移住地の養蚕を志す農家にとっては、いやがうえにも、興味をそそる存在である。

◎個人商店等

市街地には自動車修理工場、床屋、薬局、ガソリンスタンド、電話局各1、一般食料雑貨店4がある。

その他入植地全体では、農協販売所5、個人商店9、カジ屋1、製材所2、木工所2、肉屋1、八百屋1、と自営開拓移住で来芭したものの社会の要求に応じて、又、特技を生かしているいる商売をやっている。

14. 各種団体の活動

自治会の下に設置されている任意グループには青年団と婦人会がある。又、自治会とは全く関係のないグループとしては各地区（5地区）の野球部、地区別或いは作物別の農業研究グループ、宗教団体、県人会、同船者会といったものがあげられる。婦人会の主な仕事はコロニアを精神的、物質的に潤いのあるものにしようとのスローガンのもとに機関紙の発行、墓地の定期清掃、入植祭、運動会等の会場で昼食用の仮設食堂の経営等を行なっている。墓地の定期清掃は5地区の婦人会が順ぐりに行なっており、これを機会に診療所の医師を頼んで保健衛生や食生活の改善等について懇談会形式で話合いがもたれている。青年団の活動はこれと違って積極的なものはないが、年間に数多くある行事の準備、後かたづけは一手に引き受けている。又、自発的に売店の経営等も行なっているし成人式の際、血液型を診療所に登録しており、急患が出た場合の輸血要員にもなっている。地味ではあるが緑の下の力持ち的な存在である。

野球部は5地区よりそれぞれ1チームを編成し、毎年イタプアリーグ戦に出場する優勝チームを決定するため、リーグ戦が展開される。過去、アルトバラナリーグの優勝チームが、イタプア大会、全バ大会で度々優勝している。

15. 家庭生活

(1) 衣食住

食生活は豊かである。地味が豊かで気候が日本南部とほぼ同じであるため、日本で出来る野菜は何んでも出来る。模範農家の欄でも記したが年間豚を40頭食べている家庭もある。それ程まででないにしても殆どどの家庭では豚や鶏を飼っており肉摂取量は多い。

衣は農作業が中心であるため、普段は比較的粗末であるが、いざ結婚式ともなると日本から持参のモーニングに縞のネクタイ、糊のきいた純白のワイシャツ、女性は着物で着飾り野良で合った時と見違えるばかりの正装をして来る。作業衣はパラグアイ製のも

のが割合安く手に入る。面白い現象としては日本製地下足袋の良さが現地人人夫の間でも認められ相当に普及している。背格好も日本人とほぼ同じで顔付きも似ており、日本語もコンニチワ位の片言を話すそれに地下足袋をはいて妻やら帽子をかぶっていると日本人と間違えることがよくある。

住は次第に良くなっており板屋根から瓦屋根に変わって来ているが、日本人の特性としてレンガ造のものは全くなくすべて木造で一般に粗末である。結局、衣、食、住ともすべて日本のものをそっくりそのまま地球の裏側のパラグアイに持って来ており、農家の庭先で写真を撮ったものを見ると日本の農家と何ら変らない感じである。今後住宅の改造が必要である。

(2) 主婦の仕事

一日の生活も日本の農村と殆んど変らない、ただ日本の農業と大きく異なることは耕作面積が桁違いに大きいことである。又、仕事は主に重作業が多く忙がしいが女性の手ではおえない仕事が多いため、主婦の屋外の仕事は家庭菜園管理（果樹園を含む）家畜の飼育等が主である。

16. 保健及び医療

(1) 主な疾病

当地特有の疾病としてはマラリアがある。然し熱帯地方に分布する悪性のものとは異なり比較的症状は軽く、自宅で治療することが多い。40° 前後の熱が2～3日続き、ふるえが来るが特効薬があり、安静にしていれば問題はない。

年間を通して最も多い疾病は流行性感冒である。続いて高血圧症、更年期障害等であり、外科系では切創、盲腸炎が多い。

(2) 保健対策、治療

前にも記したが、市街地には事業団直営の診療所があり、救急車も所有しており殆どどの疾患の治療にあたる他、予防注射、ワクチンの投与等、予防衛生業務も行なっている。なお重症や特殊の病気はエンカルナシオン市のパ国立病院へ送られている。なおパ国の歯科医を特約し巡回診療所で治療を行なっている。設備、技術とも非常に優秀であるため近隣のパラグアイ人、ドイツ人等も数多く診療を受けに来る。騒音、煤煙のないのはいうまでもなく、年間平均気温 29.9°、雨量 1,800mm、台風、梅雨のような極端な自然現象もなく、人間を初めとする諸々の生物の住みやすい生育しやすい環境である。

17. 教 育

(1) 公立学校の現況と就学状況

アルトバラナ入植地内5ヶ所にあるパ国立小学校の校舎はすべて旧海協連によって建

てられた木造の建物で、すでに相当古くなっているため1970年以降より暫時レンガに建替する計画である。

入植当初は日本の義務教育を中退した児童がそのまま現地の義務教育に横すべりしたため、語学の点でついていけず、途中で退学したり就学しなかった例が非常に多かった。

しかし、入植後古い者で9年新しい者で6年を経過しており、現在就学している児童のほとんどが、当地で生まれるか、あるいは日本において義務教育を受ける以前に、すなわち、非常に幼年で当地に来ているため言語障害が全くなく、日本人の児童の就学率はほぼ100%に達している。

1969年6月末現在の各学校の学年別、日、芭人別就学状況は次のとおり。

アカカラジャ 23km (No.2229) 小学校

教師 3名

生徒 158名

	1	2	3	4	5	6	小計	計
男	19	15	12	17	6	7	76	158
女	25	15	16	11	8	7	82	
日本人	23	12	14	17	6	7	79	158
芭国人	21	18	14	11	8	7	79	
計	44	30	28	28	14	14	158	

アカカラジャ 17km (No.2230) 小学校

教師 2名

生徒 57名

	1	2	3	4	5	6	小計	計
男	9	6	7	6	2	3	32	57
女	6	6	7	3	1	2	25	
日本人	6	6	8	5	2	3	30	57
芭国人	9	5	6	4	1	2	27	
計	15	11	14	9	3	5	57	

ピラボ 22km (No.2231) 小学校

教師 3名

生徒 91名

	1	2	3	4	5	6	小計	計
男	13	15	8	6	2	11	36	91
女	7	7	8	1	4	9	55	
日本人	10	10	7	5	6	17	65	91
芭国人	10	12	9	2	0	3	36	
計	20	22	18	7	6	20	91	

ピラボ 13km (No.2803) 小学校

教師 2名

生徒 61名

	1	2	3	4	5	6	小計	計
男	7	5	5	8	7	6	38	61
女	7	3	7	5	0	1	23	
日本人	10	7	12	13	7	7	56	61
芭国人	4	1	0	0	0	0	5	
計	14	8	12	13	7	7	61	

カレンズ 7km (No.2035) 小学校

教師 2名

生徒 26名

	1	2	3	4	5	6	小計	計
男	3	2	3	2	3	2	15	26
女	1	1	1	1	3	4	11	
日本人	4	3	3	3	6	6	25	26
芭国人	0	0	1	0	0	0	1	
計	4	3	4	3	8	6	26	

(2) 日本語学校の現況と就学状況

現在運営している日本語学校は小学校5校、中学校2校である。授業は公立学校の体みである土曜、日曜に行なわれており科目は、国語、数学が主体で高学年では社会も教えている。なお教科書は日本から取寄せ無料支給している。コロンビア内の有識者が教師となり教鞭をとっている。

各校の概要は次のとおり。

学校名	所在地	教師数 (名)	生徒数						学 科	備 考	
			1年	2年	3年	4年	5年	6年			計
アルトパラナ第1小学校	アカカラジャ 23K	3	16	23	14	15	16	13	87	国語、数学、社会	毎週土曜
第2小学校	アカカラジャ 17K	1	3	0	2	0	3	2	10	国語、数学	"
ピラボ第3小学校	ピラボ22K	3	13	6	3	8	3	12	44	国語、数学、社会	毎週日曜
アルトパラナ第4小学校	ピラボ13K	3	9	8	9	11	7	20	84	国語、数学、社会	"
カレンズ日本語学校	カレンズ7K	2	3	3	6	5	6	4	26	国語、数学	"
ピラボ22K中学校	ピラボ22K	2	15	8	0				23	国語、数学、社会、珠算	"
ピラボ13K中学校	ピラボ13K	1	12	0	0				12	国語、数学、社会、珠算	"

(3) 上級学校への進学状況

アルトパラナ入植地出身児童の上級学校進学状況は下表のとおりである。

毎年卒業生の約40%が中学に進学しており、この数は決して多くはない。これは(1)でも記したように日本においてある程度高学年まで進んだ者が現地義務教育を受け、最近になって、漸く上級の学校に進学する時期になったことによるもので、今後芭国の義務教育を何の抵抗もなく受入れて来た新しい世代(現在の小学生)に移るにつれ、次第に進学の割合は増加するであろう。なお事業団では中学生、高校生に対する奨学金制度を実施している。

(1969年7月現在)

上級学格名	所在地	進学者数
フラム中学校	フラム入植地	12名
コレヒオ・サンブラス	オブリガード	24名
エンカルナシオン中央学校	エンカルナシオン	4名

(4) 青年教育対策

前記(1)(3)でも記したように、日本、パラグアイを通じて、両方の義務教育を中途半端な状態でしか受けていない者が、次の世代を背負う青年の中に50%以上もあり、これの教育について強力な方策が必要である。現在事業団では農場で行なわれている営農講習を利用して青年教育を行なっているほか、青年学級の強化、近隣先進国への派遣研修制度を計画し、これら青年層への教育の浸透をはかっている。又、将来医師及び看護婦希望の中から優秀な者を選び正規の資格を得るため事業団では特別奨学制度も実施している。

18. 交通・通信

(1) 交通

イタプア県の県庁所在地、人口約5万人のエンカルナシオン市まで80km、小型バスで約2時間半である。1日5往復のバスの便がある。道路は舗装されていないが、割合に良く管理されている。パ国の習慣として舗装されていない道路は雨が附ると閉鎖され、車による交通は杜絶えるが、徒歩と馬はフリーパス、これも又、パラグアイ流ののんきで良いところである。どこかの国のように自動車がわがもの顔にのさばり人間が小さくなっているというような本末転倒の状態は見当らない。

しかし、この状態が続くのも、ここ2~3年で現在アメリカからの借款による舗装計画が進められており、スローテンポではあるがパラグアイも古き良き時代より新しい便利な時代へ移行しつつある。

空路は移住地内のアルトパラナ飛行場より、アスシオンまでテコテコで1時間である。

(2) 通 信

移住地内には6台の電話がある。(TEL. No. 1~6) 1. 事業所, 2. 診療所, 3. 農協, 4. ガソリンスタンド, 5. 警察署, 6. CAPSA, 近い将来農場 ISEPSA (乾糶工場) にも電話が引かれる予定になっている。又, 農協からは3つの支所に親子電話が引かれており, 取り引き連絡治安上大きな力になっている。これらの電話から国際電話をかける事も可能で, 一寸たかいので気が気ではないが, 日本にかけると嘘のように鮮明な声がキャッチできる。郵便は日本まで約10日間の日数を要する。

19. 移住地内の年間行事

- 1月1日 お正月 一番暑いきかりである。ついた餅が3日くらいでカビだらけになってしまう。日本の行事をほとんどそっくりそのままもってきているが, その中で最も気分の出ないチグハグな感じのするのが正月である。
- 1月15日 成人式 自治会が主催し, 満20才になった青年男女に記念日(苗木)を贈呈する。又, この青年達に, 血液型, 血沈値, 血圧等を検診したアルトパラナ診療所発行の健康手帳が配付される。今年, 成人式を迎えた者は男32名, 女8名である。
- 5月初旬 敬老会 各村が主催し, 60才以上の老人を対象に長寿を祝う。年寄りには楽しい1日である。
- 6月~7月 地区運動会 農閑期を利用して各地区別に運動会が開催される。家族全員が参加し, 賑やかな1日である。
- 野球リーグ戦 アルトパラナ地区代表チームの選抜リーグ戦である。昨年より往時の常勝チームであるアカカラジャ23Kチームと, 他チームが互格の力量を持って来たため, 白熱した試合が展開される。
- 8月2日 入植祉 1960年8月2日第1次移住者が入植した日を記念し, 盛大な式典と行事が行なわれる。
大きな式典としては, 入植以来, 志をなかげにして逝れた人達に対する慰霊祭と, 入植記念式典があげられ相撲大会が開催される。
- 8月3日 大運動会 ビラボ大橋を境に紅白にわかれ市街地のグラウンドで熱戦が展開される。
- 8月中旬 盆踊り 日本の旧のお盆の時期であり地区別に盆踊り大会が開催される。青年男女の交際の場でもある。
- 8月16日 少年リフトボール大会 パラグアイの子供の日に当り, 5つの小学校の間で

試合が行なわれる。

その他、時期は決っていないが、農産物品評会、映画会、小学校6年生の修学旅行等が各地区で開催される。又、今年から新しく5つの小学校に少年野球チームが結成され、9月に第1回大会が開催される。

個々の冠婚葬祭、数多くあり年間平均すると結婚式約20組、出生約50名、死亡約10名である。その他、同乗船者会、県人会、宗教団体の集り等、楽しい雰囲気の中で集る機会は非常に多い。

海外移住事業団

東京都新宿区本塩町8-2 (住友生命四ツ谷ビル)

電話 東京 (03) 359-8281 (代) 〒 160